

看護師による患者及び家族への意思決定支援に関する 文献レビュー

松本看護大学看護学部看護学科

関 永 信 子

広島文化学園大学大学院看護学研究科

塩 谷 久 子

要旨 【目的】本稿では、看護師による患者及び家族の意思決定支援の動向や特徴を知り、今後の課題を検討するために文献レビューを行った。

【研究方法】研究対象としたのは、2000年から2019年の間に医学中央雑誌 Web 及び CiNii に掲載された文献のうち「意思決定」「看護師役割」のキーワードを用い検索した文献96件である。得られた文献より意思決定における現状と特徴を分析し、今後の課題を検討した。

【結果・考察】医療分野における看護師による患者・家族への意思決定支援は臨床の多様な対象に行われており、看護師の役割と捉えられていた。支援内容は退院支援、治療方法の選択、寄り添い、傾聴などがみられた。さらに、支援時の看護師の自己形成能力や高度の知識・技術の必要性が指摘されている。一方で、支援時の課題として、医療者側と患者側の情報提供量の不均衡が明らかになった。医療者側から患者・家族への情報提供が多く、逆のケースが非常に少ない現状である。また、医療分野の意思決定支援は、支援する看護師の思考や知識に影響されがちである。客観的な評価やツールを設ける必要性があり、意思決定の場面や程度に応じた支援プログラム開発の可能性が示唆された。

キーワード：患者と家族、意思決定、医療分野、看護師役割

■ はじめに

意思決定とは、ある目標を達成するために、複数の選択可能な代替的手段の中から最適なものを選ぶことである。

現在、意思決定は心理学、経営学、経済学、政治学など多くの分野で共通して取り扱われている概念であり、近年、医療分野にも取り込まれてきている。しかし、現実の意思決定は社会の複雑性、不確実性、不安定さ、個人の独自性、価値葛藤などから影響を受けるものである。特に医療の現場では様々な要因から影響を受けることが多い。水澤他 (2011)¹⁾ は、認知症高齢者の自己決定能力をめぐる医療の課題や自己決定のアセスメント、能力評価などを検討する必要性を述べ、自己決定を支える看護職の役割を指摘した。

また、影山他 (2015)²⁾ は退院支援の意思決定において、意思決定の方法や内容、看護師役割、退院調整過程は明らかにされているが、個別の事例への具体的な実践が見えづらいことを報告し、これに対し実践における看護師の認識や判断及び支援の実態を明らかにしていく研究の必要性について述べている。医療の場で患者及びその家族の意思決定に対する関心が高まっているこの時期に、看護師の意思決定支援の在り方について有意義な議論を行うには、本邦の医療現場で患者や家族の意思決定がどのよう

連絡先：関永 信子

〒399-0033 長野県松本市笹賀3118番地

E-mail: n.sekinaga@matsutan.ac.jp

に認識され、扱われ、研究が行われてきているかを考察することが重要である。

本研究では看護師による意思決定支援に言及した文献を取り上げ、現状を把握し課題の抽出に取り組んだ。

■ 目的

本研究は、本邦において発表された医療分野における看護師による意思決定支援に関する論文を検索・レビューを行うことにより、医療分野における患者・家族への意思決定支援に関する研究の動向及び特徴を知り、その課題を明らかにすることを目的とする。

■ 研究方法

1. **文献収集及び分析対象の抽出**：医学中央雑誌（医中誌）Web 及び CiNii を用いて、2000年から2019年までの過去20年間の文献のうち「意思決定」「看護師役割」のキーワード探索を行い、112文献を収集した。そのうち、支援対象が患者及び家族ではない文献16件（看護教育・実習等への支援、外国での実践例、看護技術の向上、労務管理に関するなど）を除外し、最終的に意思決定支援について述べられている患者及び家族を対象とした文献96件を分析対象とした。

2. **用語の定義**：本研究における意思決定支援とは、患者・家族が一群の選択肢の中からある選択肢を採択する、すなわち行為の選択を支援することを指す。決定の主体者は患者・家族であるので、本研究では医療の現場における意思決定支援と限定する。

■ 結果

1. 意思決定支援の研究の動向

1) 年代別推移

図1は抽出した文献96件の年代別推移を見たものである。「意思決定」と「看護師役割」のキーワードで探索したところ、2000年から2010年までの11年間では、2007年に1件のみであったが、2011年から次第に増加している。2011年と2015年とを比較すると、約4倍に増加していた（図1）。

2) 研究方法による分類

対象とした96文献を研究方法ごとに分類した。その結果、看護師が患者・家族の意思決定へ介入する「支援の実践」に関する研究では文献29件のうち22件が事例研究、質的研究は6件、量的研究1件であった。事例研究が多いことが明らかになった。また、その対象は終末期、がん等の疾患、難病による問題、医療ケアの選択などを抱える困難事例と広範囲にわたっている。一方、意思決定支援の際の看護師の「看護師役割」

に関する文献では文献37件のうち事例研究3件、質的研究24件、量的研究5件、文献研究5件であり、質的研究が多かった。成功例や支援の有用性に言及した「支援の有用性」に関する文献では29件のうち事例研究1件、質的研究14件、量的研究9件、文献研究5件であり、質的研究による報告が多かった。

2. 意思決定支援の分類（図2）

分析対象である96件の文献を「意思決定への支援状況」の視点から看護師による意思決定支援の動向

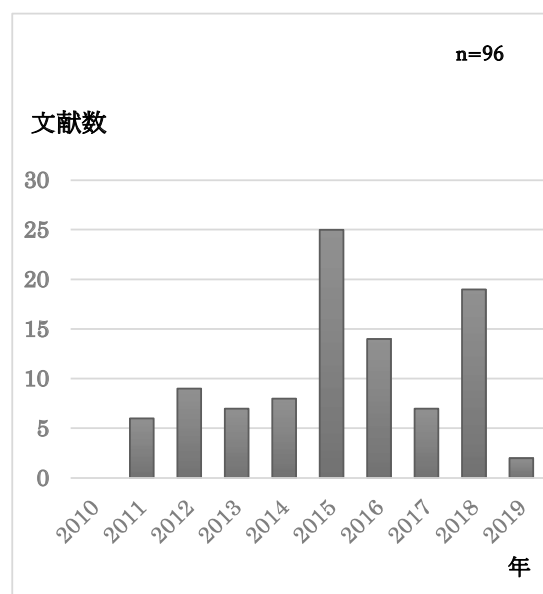


図1 意思決定に関する文献数の推移

1) 支援の実践；意思決定の介入や方法について書かれた文献（文献数 29）

- (1) 終末期の患者に関するもの（文献数 8）；石原他（2014）；山田（2018）；徳住（2013）；小倉他（2014）；芳野他（2015）；小林（2016）；菊池他（2018）；塩田他（2013）
- (2) がんを有する患者に関するもの（文献数 4）；土井（2015）；岩岡（2016）；山本(千)（2016）；古舘他他（2017）
- (3) 医療者側が考える困難例に関するもの（文献数 4）；稲田他（2012）；鈴木他（2011）；大桃（2014）；梶原（2014）
- (4) 健康のレベルや身体の状態に応じたもの（文献数 4）；大久保他（2015）；山本(萌)他（2016）；松井他（2015）；崎原他（2017）
- (5) 医療処置を有する患者に関するもの（文献数 3）；堤他（2015）；中村他（2018）；中谷他（2016）
- (6) 多様な問題点を有する患者に関するもの（文献数 3）；小山（2013）；高橋（2015）；吉田他（2016）
- (7) 妊娠期や授乳期に関するもの（文献数 3）；竹内他（2012）；森屋（2014）；久世（2018）

2) 看護師役割；看護師役割について書かれた文献（文献数 37）

- (1) 意思決定の責務や倫理的側面に関するもの（文献数 12）
 - ①ジレンマの認識と倫理的支援；
秋山他（2011）；片岡（2016）；渡邊他（2016）；宮岡他（2018）；長尾（2014）；影山（2015）
 - ②意思の尊重と支援；
福地本他（2015）；万代他（2015）；永野他（2016）；伊藤（2014）；石川他（2016）；田中他（2015）
- (2) 看護師自身に関するもの（文献数 10）
 - ①看護師の認識, 指向性, 価値観に関するもの
神田他（2015）；根本他（2012）；三井他（2013）；豊田他（2015）；渡慶次（2018）；大河他（2016）；堀（2018）
 - ②看護師の経験と自己評価に関する内容；
中嶋（2018）；御家瀬（2018）；長岡（2018）
- (3) 合意形成のプロセスに関するもの（文献数 8）
 - ①インフォームドコンセント・情報に関するもの；
菅原他（2018）；木下他（2015）；阿部他（2012）；舞弓（2013）；田島（2018）
 - ②合意形成に関する内容；
酒井他（2015）；土橋（2019）；石垣他（2018）
- (4) 代理意思決定支援に関するもの（文献数 7）
水澤（2011）；森他（2012）；伊藤（真）他（2014）；矢野（2015）；藤浪他（2018）；石井（2015）；小林（2012）

3) 支援の有用性；成功例や重要性について書かれた文献（文献数 29）

- (1) 成功例と有用性に関するもの（文献数 13）；
丹下他（2012）；木場（2013）；高松他（2012）；上西（2012）；野上他（2014）；寺岡他（2011）；池田（2015）；
工藤他（2017）；田中他（2015）；布施（2018）；影山他（2015）；金子他（2011）；櫻木他（2019）
- (2) 連携やシステムに関するもの（文献数 11）
 - ①多職種との連携について；半田他（2011）；今井他（2016）；黒木他（2015）；甲（2016）；坂本他（2017）；
松本他（2015）；林他（2018）；市原他（2016）
 - ②システムについて；西村他（2015）；谷本他（2018）；馬場他（2015）
- (3) エンパワメントに関するもの（文献数 5）
森他（2016）；西岡他（2017, 2018）；尾黒他（2015）；矢向他（2015）

4) 評価開発；評価の開発について書かれた文献（文献数 1）；日浅他（2017）

図2 意思決定支援の分類

と特徴を分析した。看護師が患者や家族の意思決定への介入や方法について書かれたものを「支援の実践」、支援時の看護師の認識や責務について書かれたものを「看護師役割」、成功例や意思決定支援の有有用性について書かれたものを「支援の有有用性」、評価の開発に関するものを「評価開発」として4つのカテゴリーに区別し、上記の内容が重複する場合は、重点を置いて記述されている内容を踏まえて分類した。(図2)。以下にその詳細を述べる。

1) 支援の実践；患者や家族への意思決定への介入や方法について書かれた文献（文献数29件）

意思決定支援の実践として、介入事例について書かれた文献は29件収集された。この29件を分析した結果、「(1)「終末期の患者に関するもの」「(2) がんを有する患者に関するもの」「(3) 医療者側が考える困難例に関するもの」「(4) 健康のレベルや身体の状態に応じたもの」「(5) 医療的処置を有する患者に関するもの」「(6) 多様な問題点を有する患者に関するもの」「(7) 妊娠期や授乳期に関するもの」の7つのカテゴリーに分類された。これらの多様な対象や場面で意思決定支援が実践されており、介入は患者と家族が抱える課題によって異なる。ここでは、個別的に具体的な介入や方法が取り上げられていた。

支援の場は退院時の支援が10件、治療方針の選択時での支援などが16件、精神的な支援に関するものが3件であった。

(1)「終末期の患者に関するもの」8件

終末期における意思決定の介入実践では、医療者側、患者・家族側の双方からの情報提供が望ましいこと、退院支援の場面で在宅療養を支援する他職種との連携、医療的ケアに関する選択をする際の支援がなされていた。支援の場は退院時の調整3件、在宅での支援5件であった。

石原他 (2014)³⁾ は、終末期の患者・家族への意思決定支援では、医療者からの適切な情報提供の必要性とともに、患者・家族はその情報だけでは意思を整理・決定することは困難であるため、看護師の支援が必要であることを述べている。同様に、山田 (2018)⁴⁾ は単身者の在宅看取りのケースで、患者や家族はそれぞれの意向だけでなく、医療者と適正な情報を共有し、最終的な合意形成をする必要性を論じていた。さらに、終末期の在宅移行への意思決定において、徳住 (2013)⁵⁾、小倉他 (2014)⁶⁾、芳野他 (2015)⁷⁾、小林 (2016)⁸⁾、菊池他 (2018)⁹⁾ は介護体制の整備・社会資源の導入など在宅支援を担う多職種との連携の必要性を述べている。また、前述のいずれのケースも、患者・家族が、治療の判断や医療機器の導入に医学的判断をする場面があることを指摘し、それらの選択への支援を報告している。

また、塩田他 (2013)¹⁰⁾ は、判断力の低下がみられる高齢期夫婦の終末期のケースでは弁護士の助言や、事前指示ノートの作成支援の取り組みを報告している。

(2)「がんを有する患者に関するもの」4件

「がんを有する患者に関するもの」は4件であったが、最初の2例はがんを有する患者の退院支援に関するもので、後述の2件は、治療方針の選択とそれにかかわったチームアプローチの例である。

土井 (2015)¹¹⁾ は、高齢がん患者の退院支援において、入院時から退院支援スクリーニングに沿った看護の事例を報告している。また、岩岡 (2016)¹²⁾ は緊急搬送された2事例から、患者の歴史を知り患者がどう生きたいかを支援した看護を紹介している。妊娠中の乳がんの再発のケースから、山本(下)(2016)¹³⁾ は患者や家族と医療者の合意には、双方向からの情報提供で解決に当たることを論じている清水の情報共有-合意形成モデル¹⁴⁾の必要性があることを指摘していた。さらに、妊娠中の乳がん発生から帝王切開に至ったケースでは、古館他 (2017)¹⁵⁾ は、手術・出産・化学療法などの各部門に関連するため、チームアプローチによる意思決定支援を報告している。

(3)「医療者側が考える困難例に関するもの」4件

ここで収集された困難例とは、すべて医療者側が感じている困難例であった。退院調整看護師が入退院を繰り返す患者に、本人の意向の確認と課題を明確にし、不安要因を取り除き、退院後の生活をマネジメントした例 (稲田他, 2012)¹⁶⁾、緊急・単身・身寄りがないなどの事情で退院が困難である患者の医学的判断や倫理的判断を支援した例 (鈴木他, 2011)¹⁷⁾；大桃, 2014¹⁸⁾、多重課題を持ち、身寄りがないホームレスに、行政職や支援団体との連携によるチームアプローチで、白浜の臨床倫理の4分割法を活用し、自己決定を促した事例 (梶原, 2014)¹⁹⁾を報告している。

前述の3例は帰宅困難な事例についての退院調整に関する事例である。最後の梶原の事例は循環器系の手術に関する自己決定を支援した事例である。

(4)「健康のレベルや身体の状態に応じたもの」4件

健康のレベルや身体の状態に困難を抱えている移植患者・重症褥瘡患者・下肢切断適応患者・経口摂取困難患者に対する意思決定の介入方法が記載されていた。渡航移植待機患者と移植コーディネーターとの連携（大久保他，2015）²⁰重症褥瘡患者に対するチームアプローチ（山本_{（前）}他，2016）²¹、下肢の残存を望む患者に対しフインクの危機モデルを活用し、信頼関係の構築・価値観の尊重に至り、下肢切断の決意を支援した例（松井他，2015）²²、高齢患者の胃瘻造設に関して経口摂取を希望する家族の思いに寄り添いつつ、患者の意思決定を支えること（崎原他，2017）²³が報告されていた。

4件とも治療方針決定の選択に関わる支援である。

(5)「医療的処置を有する患者に関するもの」3件

取り上げられている3件は、医療的ケアを必要とする乳児、ストーマの再造設を要する青年期の女性、透析中断の患者であった。これらのケースに対応するためには、NICU入院中の乳児の母親との相互作用が望ましいケアに影響すること（堤他，2015）²⁴、総排泄腔外反患者への臨床心理士の介入（中村他，2018）²⁵、慢性腎不全患者への効果的な意思確認の時期の見極め（中谷他，2016）²⁶が述べられていた。

3件とも、重度の疾患により医療的処置を必要としている患者及び家族への治療方針の選択の支援であった。

(6)「多様な問題点を有する患者に関するもの」3件

ここで取り上げられたのは、統合失調症患者・筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者・慢性閉塞性肺疾患（COPD）の事例である。長期入院を経て退院に至った統合失調症患者のケースでは家族の意向が優先されやすいこと（小山，2013）²⁷、ALS患者の場合、病気の進行が退院の時期に影響を与えること（高橋，2015）²⁸、COPD患者の緊急時の対応のあり方（吉田他，2016）²⁹などの問題点が指摘された。

前2件は退院支援に関連し、COPD患者の例は自己管理と急変時の意思決定に関するものである。

(7)「妊娠期や授乳期に関するもの」3件

先天性異常児・出生前診断・胎児疾患を指摘された母親たちの事例が取り上げられている。妊娠中に18トリソミーと診断された母親に対する情報の確認と提供（竹内他，2012）³⁰、妊娠中にダウン症候群を恐れて出生前診断を希望し、医療者に決定を求めようとする例（森屋，2014）³¹、妊娠中期に18トリソミーと診断され、「看取り」を選択した母親の揺れる思いに寄り添うこと（久世，2018）³²などの実践が示された。

3例とも保護者たちの問題点の解決のために、気持ちに寄り添う姿勢が示されている。

2) 看護師役割；看護師役割について書かれた文献（文献数37件）

患者や家族の意思決定プロセスを支える「看護師役割について書かれた文献」は37件あり、分析した結果、看護師役割は「(1) 意思決定の責務や倫理的側面に関するもの」「(2) 看護師自身に関するもの」「(3) 合意形成のプロセスに関するもの」「(4) 代理意思決定支援に関するもの」の4つのカテゴリーに分類された。

支援の場面は退院時の調整に関するものが8件であり、他の29件は、治療方針の選択、そのための医療的知識の獲得、疾患の理解と受け入れに関する支援上での看護師役割に関するものであった。

(1)「意思決定の責務や倫理的側面に関するもの」12件

ここでは、ジレンマの認識と倫理的支援に関するものと、意思の尊重と支援に関するものそれぞれ6件あった。ジレンマの認識と倫理的支援に関するものの内訳は、看護師役割から倫理観を論じたもので、終末期患者看護の意思決定支援におけるジレンマと倫理観（秋山他，2011）³³、妊娠中期の出生前診断の受検、不妊治療等に関する夫婦間の葛藤に対する看護上の倫理観との葛藤（片岡，2016）³⁴、難病看護の看護支援の意味付けに関するジレンマ（渡邊他，2016）³⁵、重症患者の看護における問題を明確化できないジレンマ（宮岡他，2018）³⁶を取り上げている。

家族と患者間、家族と医療者間の意思のズレに倫理上の問題を感じる例を論じたものは以下の2件で

ある。長屋 (2014)³⁷⁾ は胎児異常を告げられた母親の例、影山他 (2015)²⁾ は退院支援に関する医療者側家族側の問題を文献レビューで報告、双方の意思のズレをとりあげている。

次に、意思尊重の支援に関するものでは、抗悪性腫瘍剤の選択をする患者自身が葛藤を抱いていることを明らかにしたもの (福地本他, 2015)³⁸⁾ や看護師役割から患者家族の意思の尊重を論じたものがある (万代他, 2015)³⁹⁾ (永野他, 2016)⁴⁰⁾、肝疾患患者の療養継続支援に関する倫理的課題をとりあげたもの (伊藤_(あ) 他, 2014)⁴¹⁾、さらに具体的な方法として、ICU 領域における看護師は患者の家族に現状理解の促進を図り、家族と医師との調整役、患者・家族の思いの傾聴に役割を感じている (石川他, 2016)⁴²⁾、患者の意思の揺らぎへの対応 (田中他, 2015)⁴³⁾ を提示している。このように、患者や家族の意思の尊重や支援は、看護師の役割として捉えられていた。

(2) 「看護師自身に関するもの」10件

看護師自身に関する文献では、看護師の認識、指向性、価値観が意思決定支援時の判断行動に影響を与えると論じたもの7件と、看護師の経験と自己評価に関するものが3件あった。看護師の認識等に関するもの7件の内訳は、患者の意思決定に関わる看護師の行動を明らかにしたもの (神田他, 2015)⁴⁴⁾ や看護師の認識や意識、拠り所の重要性を指摘したもの (根本他, 2012)⁴⁵⁾ ; 三井他, 2013)⁴⁶⁾ ; 豊田他 2015)⁴⁷⁾ ; 渡慶次他, 2018)⁴⁸⁾、さらに看護師を含む医療者の価値観が患者に影響を与えると論じたもの (大河他, 2016)⁴⁹⁾ ; 堀, 2018)⁵⁰⁾ であった。なかでも神田他 (2015)⁴⁴⁾ は、意思決定に関わる看護師の行動に関して、意思決定支援のための必要情報の共有、患者の意思に沿った援助の実施、役割負担と多職種連携、環境の確保と継続実務への移行など11項目の看護師の行動概念を明らかにし、看護師の基本的能力や個人の尊重を基盤にした高度な知識や技術の必要性を論じている。

一方、中嶋他 (2018)⁵¹⁾ は看護師の経験が、患者や家族への意思決定の支援判断行動に影響することを指摘している。また、御家瀬他 (2018)⁵²⁾、長岡他 (2018)⁵³⁾ は看護師の退院支援自己評価点から、院外との連携や役割分担に課題があることを指摘している。

(3) 「合意形成のプロセスに関するもの」8件

合意形成のプロセスに関しては、インフォームドコンセントや情報について論じたもの5件と合意形成に関するもの3件が抽出された。インフォームドコンセントや情報に関するものでは、若年性の乳がん患者のインフォームドコンセントの実態を示したもの (菅原他, 2018)⁵⁴⁾ や筋萎縮性側索硬化症患者の、人工呼吸器導入の意思決定支援に対するもの (木下他, 2015)⁵⁵⁾ が論じられている。一方、意思決定の当事者である患者は治療の選択に悩んでおり (阿部他, 2012)⁵⁶⁾、インフォームドコンセントの場面で患者が主体となっていないことを明らかにしている (舞弓, 2013)⁵⁷⁾ ; 木下他, 2015)⁵⁵⁾。田島 (2018)⁵⁸⁾ はインフォームドコンセントに関わる看護師の支援内容として、インフォームドコンセントの定義と理解、看護師役割の理解、記録の理解、患者と家族の理解など7項目を明らかにした。合意形成に関するものでは、がん患者のカウンセリングの現状 (酒井他, 2015)⁵⁹⁾ や、がん患者の妊孕性保存に関する意思決定時の情報収集の困難さを報告している (土橋他, 2019)⁶⁰⁾。さらに石垣他 (2018)⁶¹⁾ は家族間の合意形成の困難さを指摘している。

(4) 「代理意思決定支援に関するもの」7件

代理意思決定支援については、7件の文献があった。水澤他 (2011)¹⁾ は認知症の自己決定に関する研究は2003年以降急増している事に言及し、認知症高齢者の自己決定を巡る医療の課題として、自己決定能力のアセスメントや能力評価を左右する要因、自己決定を支える看護専門職について検討する必要性について述べている。また救命救急にある患者、終末期の患者の代理意思決定では、家族への支援の必要性を指摘している (森他, 2012)⁶²⁾ ; 伊藤 (真) 他, 2014)⁶³⁾ ; 矢野, 2015)⁶⁴⁾ ; 藤浪他, 2018)⁶⁵⁾。特に矢野, 2015)⁶⁴⁾ は、終末期患者の家族の代理意思決定を支援する場合に、看護師の経験や知識が自身の判断行動に影響することを報告している。

さらに石井 (2015)⁶⁶⁾ の文献では、精神科疾患患者の自己決定には環境や入院期間が影響するため、看護師の支援役割が大きいことを述べている。また、小林 (2012)⁶⁷⁾ は、介護保険施設での本人の意思確認の不十分さにより、代理意思決定が機能せず、施設内での看取りを困難にしていると指摘している。

3) 支援の有用性；成功例や重要性について書かれた文献（文献数29件）

意思決定支援の成功例や、患者・家族の支援にチームアプローチの有用であったこと、エンパワーメントの効果があることなどに言及しているに文献である。「(1) 成功例と有用性に関するもの」「(2) 連携やシステムに関するもの」「(3) エンパワーメントに関するもの」の3つのカテゴリーに分類された。

意志決定支援の場合は退院時が13件、治療の選択などにおける支援が16件であった。

(1) 「成功例と有用性に関するもの」13件

ここでは、退院支援の重要性と退院支援における成功体験・困難事例の振り返りと評価（丹下他，2012⁶⁸；木場，2013⁶⁹），専門的知識を持ち個別性を把握した意思決定支援の例（高松他，2012⁷⁰），成長発達段階期の障害の受容を支えた事例（上西他，2012⁷¹），患者の目標を支え満足度を高めることができた事例（野上他，2014⁷²），救急救命センターにおける限られた時間内での意思決定の支援（寺岡他，2011⁷³），小児急性期病棟の退院サポートの例（池田，2015⁷⁴），ストーマ保有者への継続看護（工藤他，2017⁷⁵），骨髄移植を受ける患者への説明内容の理解と精神的面への支援（田中他，2015⁷⁶）などについて論じられていた。一方、意思決定支援にかかわる人材育成の必要性（布施，2018⁷⁷）や教育プログラムの必要性（影山他，2015⁷⁸）効果的な退院支援のための看護師役割のあり方や方法論（金子他，2011⁷⁹；檜木他，2019⁸⁰）が述べられていた。

(2) 「連携やシステムに関するもの」11件

他職種との連携については、「支援の実践」や「看護師役割」の項目でも、多くの文献でその重要性が指摘されていた。ここでは、特にその必要性を主題とした論文8件を選んだ。

胃ろう増設となる重症心身障害児の母親の意思決定支援や、NICUからの退院支援、がん患者カウンセリングにおける支援、ALS患者の病初期の看護上の課題では、医師及び地域看護師と連携の強化が必要であること（半田他，2011⁸¹；黒木他，2015⁸²；今井他，2016⁸³；申，2016⁸⁴），退院後のストーマセルフケアへの継続的な支援（坂本他，2017⁸⁵），医療依存度の高い在宅患者に対する社会資源の重要性（松本他，2015⁸⁶；林他，2018⁸⁷）を報告している。中でも学童期の子どもの退院支援時の意思決定には、復学に向けた家族への働きかけと教育機関との連携の必要性を指摘した（市原他，2016⁸⁸）。

システムについては、退院支援や意思決定支援のシステム化（西村他，2015⁸⁹；谷本他，2018⁹⁰），意思決定支援担当者のバックアップのための人材の必要性（馬場他，2015⁹¹）が論じられていた。

(3) 「エンパワーメントに関するもの」5件

エンパワーメントに関するものでは、患者や家族の意思決定を支える上でエンパワーメントの重要性を示した文献（森他，2016⁹²；西岡他，2017⁹³；西岡他，2018⁹⁴），さりげなく意思決定できるよう関わる（尾黒他，2015⁹⁵；矢向他，2015⁹⁶）など具体例を示し、意思決定支援により、エンパワーメントの効果があることを明らかにしていた。

4) 評価開発；評価の開発について書かれた文献（文献数1件）

評価の開発について書かれた文献は、日浅他（2017⁹⁷）文献1件に過ぎなかった。放射線治療を受けるがん患者に対する看護の質評価指標の開発を試みたものであり、今後の看護領域での質評価指標開発において参考になる論文であった。

■ 考 察

対象文献の分析から見えた看護師による患者・家族の意思決定支援に関する現状と課題を「1. 文献数・研究方法」「2. 患者・家族への支援の実際」「3. 看護師役割としての認識」「4. 支援の有用性」「5. 評価開発」の視点で、動向と課題について考察する。

1. 文献数・研究方法の動向

医療分野における看護師の意思決定支援に関する文献検討を2000年から2019年の20年間でおこなった。「意思決定」「看護師役割」のキーワードで収集された文献数の「年代別推移」に関しては、2000年

から2010年の11年間には2007年に1件のみであったが、2011年以降から増加していた。また意思決定に関する文献を2011年と2015年で比較すると約4倍に増加していた。増えた理由として、個人の健康への意識や権利意識の変化だけではなく、家族を取り巻く社会状況の変化が見られることが考えられる。高齢社会の進展に伴い療養への視点が医療モデルから生活モデルへと転換が起きたこと、2000年に介護保険制度とともにスタートした成年後見制度による意思決定支援の枠組みの提示、及び厚生労働省（2007年）⁹⁸⁾、日本老年医学会（2012年）⁹⁹⁾ から出された意思決定のプロセスのガイドライン、さらに2008年度診療報酬改定により退院調整支援が看護師の役割として位置づけられたことなど、社会制度の変遷との関連が推察される。

「研究方法による分類」についてみると、研究方法は研究目的と対象分野によって異なっている。特に「支援の実践」の項目では、意思決定への介入や方法についての問題解決に関する研究では事例研究が30件中22件と多くみられた。意思決定支援の対象は、がん・終末期・統合失調症・認知症・難病などの疾病を抱えた事例や、手術・救命救急時・出生前診断・移植などの治療や医療的ケアの選択が必要な場合などさまざまな分野に広がっていた。事例研究で、多様なケースが紹介されている。しかし、このような個別的な事例の提示は、その時々の一過性の性質を持ち構造化しにくい事象であり、方法論としての一般化は難しいが、地道な積み重ねが理論の構築に貢献すると考えられる。

一方、「看護師役割」や意思決定の「支援の有用性」など事柄や状況を明らかにする研究では質的な研究が37件中24件と多くみられ、看護師役割の重要性や責務、情報収集の困難さなど本質的な課題が述べられていた（水澤他、2011¹⁾；他21件）。

また、影山他（2015）²⁾ は、退院支援の意思決定支援に関する研究で、カルテ上の記録や退院支援記録などからデータ収集しているものは、看護師が患者・家族と関わる中でどのように考え判断しながら実践しているのか個別性が見えづらいことを指摘している。直接にデータ収集する実践からの研究で、個別に実践値を高めていく研究の必要性が今後さらに増すであろう。

「評価開発」が1文献のみと少ないことは、この分野での今後の研究の必要性を示すものであろう。

2. 患者・家族への支援の実践

意思決定「支援の実践」の対象は終末期、がん等の疾患・難病患者による問題、治療方針の選択の支援などの多様な場面で展開されていた。支援を展開する場面は退院支援時の介入が29文献中、10件である。次に治療の選択などの医療的判断に悩む患者への支援などが16件であった。また、病児を看護する母親などへの精神的な支援のように気持ちに寄り添う看護が3件であった。これらの支援をする場合にチームアプローチも多く、その重要性を指摘している文献が29件中8件あった。

全体の文献を通して医療者側と患者・家族間の情報の不均衡が指摘されていたが、特に、「支援の実践」に関する研究では双方の情報提供の量と方向のずれが指摘されており、情報提供は医療者側からが圧倒的に多いのが現状であると報告されていた。双方の情報の不均衡は患者・家族と医療者間でのコミュニケーション不足（小林、2012⁶⁸⁾；木下他、2015⁵⁶⁾）や、治療に対する意思の違いがある場合（稲田他、2012¹⁶⁾；小山、2013²⁷⁾）にその傾向がみられた。

このような現状に、山本_(子)（2016）¹⁵⁾ は情報の提供の双方向性による情報の共有－合意形成モデル¹⁷⁾の必要性について述べている。本邦においては、1980年代の後半に医療情報を医療者と患者が共有するインフォームドコンセント《説明と同意》というモデルが急速に普及した。これは、情報の共有時代の先駆けとなったが、医療側が主体になりがちなモデルである。清水はこれに代わり得る《情報共有から合意》へというモデルを提示した¹⁴⁾。このような、同等の立場での医療チーム側と患者側の情報の共有に基づいて意思決定支援を行う認識の必要性は今後の課題であろう。

このように医療者側からの情報発信が多く、患者・家族側が受け身的であることが報告されている現状を見ると、同等の立場での医療チーム側と患者側の情報の共有は、今後に期待しなくてはならない。自ら発信することの困難な患者側の思いを汲みとり意思の疎通を図る倫理観とコミュニケーション能力を持つことは常に看護師にとって必要である。

3. 「意思決定支援は看護師役割」という認識

看護師役割について書かれた文献からは、看護師は倫理観に関するジレンマを感じつつも、患者・家族の意思の尊重といった対人援助の本質を把握している。そのうえで、医療者側と患者・家族側の合意形成に至るプロセスへの支援、認知症患者・終末期の患者・救急救命場面での患者などの代理意思決定支援などを看護師役割として広く捉えていることが明らかになっている。

そのため、意思決定支援を行う際の、看護師の基本的能力や高度な知識技術の必要性が問われている。看護師の認識や指向性、価値観が支援時の判断行動に影響を与えると論じている文献も多い（根本他、2012⁴⁶；他9件）。

臨床看護の援助技術に関する理論モデルを提言しているアーネスティン・ウィーデンバック（Wiedenbach, E. 1969）は、看護師の思考と感情及び責務について「看護師は単に行為をするだけでなく、考えたり感じたりしたことは看護師の行為であり、特定の目的の達成に向かって行為する看護師にとっては、自分の思考や感情は目的を果たすべき訓練された役割を持つ」と述べている¹⁰⁰）。彼女は「〈援助へのニード〉を持つ患者に対して、看護行為は“目的を果たすべく訓練された役割を持つ思考と感情”を熟慮して活用すべきである」と述べ、そのためには、看護師の基本的能力の向上、すなわち、患者や家族の個人を尊重する倫理観などを基盤とした高度な医学的知識や技術の重要性を明らかにした。臨床における意思決定支援には、彼女の言うように深い思考と知識、さらにそれを支えるための自己を形成する能力が必要であろう。

以上のように、意思決定支援は多くの看護師が自己の役割として捉えているが、一方では支援における看護師役割の在り方についての葛藤や、自己の倫理観と患者・家族の倫理観が一致しない場面もあり、倫理的ジレンマや課題も抱えていた。看護師のみで解決を図るのではなく、支援のためのチームアプローチ（山本^前他、2016）²¹）も多く試みられ、連携を図っている現状がある。医療ソーシャルワーカーをはじめとする他職種を混入したチーム支援の在り方がより検討されるべきであろう。

4. 支援の有用性

看護師役割として、専門的知識を持ち個別性を把握して、意思決定支援をすることにより成功した支援例、また多職種とのチームアプローチにより支援に成功した例が報告されている。退院時の支援における支援システムの構築、支援により患者・家族をエンパワーメントできていることなどの報告があり、意思決定支援の有効性を証明している。

5. 評価システムとプログラム開発に関する課題

意思決定は患者や家族が医療を受けるすべての場面で生じることである。文献からも、意思決定支援については、支援が必要な対象者に対して介入の時期や意思確認が段階的に行われていたことが明らかになっている。このような支援の場面において、支援する看護師自身の思考と感情に影響されたり、個人の人々の良識や知識に依存するのではなく、幅広く合理的に考えられるようなガイドラインが必要となるであろう。さらに、患者や家族に対して、問題の特定や解決の方向性を指し示す情報提供となり得、さらに自己決定することで満足感を得ることができるような支援プログラムの開発が必要であろう。「成功例や重要例について書かれた文献」によると、人材育成やそのための教育プログラムの必要性を指摘しているものは多い（馬場他、2015⁹¹；西村他、2015⁸⁹；影山他、2015⁷⁸；田島、2018⁵⁸）。

今回の文献検討から、支援内容がしばしば繰り返される出来事に対しての情報収集・アセスメント評価など問題解決のアプローチを設けることで、プログラム化の可能性が示唆された。意思決定支援に危機モデルや看護師による自己評価尺度など、客観的な評価のツールやプログラムの開発が今後ますます検討されることが必要であろう。

■ 結論

医療分野の看護師による患者及び家族への意思決定支援は、医療のさまざまな場面において実施され

ていたが、退院時の支援が31件と全体の3分の1を占めていた。

支援の内容は、退院調整、治療方針の選択、疾患・障害の受容、傾聴など精神面での看護など、多様で個別的な取り組みが実践されていた。

その中で、下記のような課題が明らかになった。

1. 意思決定支援は多くの看護師が看護師役割として捉えているが、倫理的ジレンマや課題も抱えている。他職種を混入したチームアプローチがより検討されるべきであろう。
2. 看護師の認識や指向性、価値観が支援時の判断行動に影響を与えるため、看護職の基本的能力の向上や高度の知識技術の必要性が論じられていた。
3. 医療者と患者・家族間における情報提供の不均衡があり、医療チームから発するものが多かった。医療チーム側、患者・家族側の双方にとって最善と思える意思決定のためには、情報共有－合意形成モデルに基づいた支援が必要であろう。
4. 意思決定支援に焦点を当てた客観的な評価と支援プログラムの開発が求められる。

引用文献

- 1) 水澤久恵, 出貝裕子: 認知症高齢者の自己決定に関する文献の動向. 新潟医学会雑誌125(8): 65-75, 2011.
- 2) 影山葉子, 浅野みどり: 家族への退院支援に関する国内文献レビュー (第1報) -退院における家族への意思決定支援に焦点を当てて. 家族看護学研究 第20巻 第2号: 93-105, 2015.
- 3) 石原由花, 山崎智子: 緩和ケア中心の療養へ移行するがん患者へ看護支援の検討 患者の療養に対する認識と看護師の受け止め. お茶の水看護学雑誌8(2): 18-34, 2014.
- 4) 山田真琴: 患者の意思決定を支える退院指導看護師の役割意向が揺れるB氏との関りから. 北海道勤労者医療協会看護雑誌44: 10-11, 2018.
- 5) 徳住恵美: やりがいのあるチーム活動を支える看護師長の役割と取り組み 終末期がん患者の退院支援を通して. 佐世保市立総合病院紀要39: 75-77, 2013.
- 6) 小倉敦子, 岡本薫, 船越真由美他: 終末期を迎える療養者への在宅支援 看取りを可能にする訪問看護の役割. 旭川荘研究年報45(1): 76-78, 2014.
- 7) 芳野菊子, 太田憲司, 山本美雪他: 慢性心不全終末期における意思決定支援にむけた病棟看護師の役割. ホスピスケアと在宅ケア23(1): 11-16, 2015.
- 8) 小林昌子: 終末期高齢者とその家族を支える方向性をとらえる役割-12年間のかかわり-在宅看護に至った事例を通して. 北海道看護研究学会集録平成28年度: 18-20, 2016.
- 9) 菊池みのり, 越前真理子, 後藤亜愉子他: 在宅で終末期高齢者を介護する家族への支援-2事例の家族支援を通して訪問看護師の役割を考える. 北海道看護研究学会集録平成30年度: 79-81, 2018.
- 10) 塩田絹代, 角田ますみ: 人生の終末期に視点を置いた利用者本位の意思決定の支援 90歳代夫婦の在宅支援の事例. 東邦看護学会誌 (10): 29-34, 2013.
- 11) 土井康衣: 退院支援における病棟看護師の役割-終末期患者への退院支援のプロセスを基にした事例検討. 通信医学67(4): 256-261, 2015.
- 12) 岩岡有希子: その人らしく生きることを支援する~心寄添う看護の実践 生活を支える退院支援 急性期病院だからこそ「生活」にこだわって. 北海道勤労者医療協会看護雑誌 42: 8-9, 2016.
- 13) 山本千明: 妊娠17週で乳癌の再発が発見されたA氏の妊娠継続プロセスにおける看護師の役割. 市立福知山市民病院医学雑誌 1: 74-79, 2016.
- 14) 清水哲郎: 本人・家族の意思決定を支える-治療方針から将来へ向けての心積もりまで. 医療と社会25(1): 5-48, 2015.
- 15) 古舘美妃, 三池由紀: 妊娠乳がん患者に対する多職種での意思決定支援. 岡赤十字看護研究会収録 (31): 11-13, 2017.
- 16) 稲田真理子, 菊内由貴, 廣澤光代他: 入退院を繰り返す患者の例を通しての退院調整看護師として

- のかかわり 地域と共に患者と家族の意思を支える. 中国四国地区国立病院機構 国立療養所看護研究学会誌7:65-68, 2012.
- 17) 鈴木裕子, 吉田沙那子, 小峰美輪: 退院支援における病棟看護師の役割—患者・医師・看護師の認識の相違からの検討. 日本看護学会論文集 (41): 193-196, 2011.
 - 18) 大桃美穂: 急性期患者への意思決定プロセス支援と看護師の役割. 生命倫理24(1): 207-215, 2014.
 - 19) 梶原由美: インフォームドコンセントにおける看護の役割—ホームレス患者の意思決定支援を通して. 日本看護学会論文集 (44): 90-93, 2014.
 - 20) 大久保沙樹, 矢田萌莉, 北野敦子: 渡航心臓移植待機患者・家族への看護師の関わりと問題点—心臓移植に向けた関りからの考察. 信州大学医学部病院看護研究集録43(1): 42-46, 2015.
 - 21) 山本萌絵, 澤瀨美佳, 日下ひとみ他: 重症褥瘡患者に対する多職種によるチームアプローチ—患者・家族と密に関わる病棟看護師の役割の重要性. 淀川キリスト教病院学術雑誌2016: 8-32, 2016.
 - 22) 松井鮎子, 江津篤, 新友香子他: 救急病棟における患者の意思決定支援について. 信州大学医学部病院看護研究集録43(1): 33-34, 2015.
 - 23) 崎原桂, 仲宗根孝, 安谷屋リラ他: 経口摂取困難例に対する当院での意思決定支援. 沖縄赤十字病院雑誌22(1): 49-51, 2017.
 - 24) 堤梨那, 前田和子: NICU 入院中の乳児をもつ母親の医療的ケア提供者としての退院準備—決意と自信に影響を与えた重要他者との相互作用. 沖縄県立看護大学紀要 (16): 33-47, 2015.
 - 25) 中村雅恵, 濱野敦, 花井孝宏他: 尿路再建術を施行した青年期総排泄腔外反症. 静岡県立こども病院看護部看護研究集録2433-6149 (XVI): 68-73, 2018.
 - 26) 中谷誠子, 樋口京子, 福田幸子他: 抹消壊死, 強い疼痛のため透析を中止した慢性腎不全終末期患者と家族の意思決定支援を考える. 盛岡赤十字病院紀要25(1): 102-107, 2016.
 - 27) 小山明美: 長期入院を経て退院に至った統合失調症患者の自己決定のプロセス. 日本看護倫理学会誌5(1): 40-45, 2013.
 - 28) 高橋香苗: 神経・筋難病研修を受講して—当院での退院支援への活用. 都市立病院紀要35(1): 41-42, 2015.
 - 29) 吉田千夏, 樋口真由美, 岡崎直美他: 慢性閉塞性呼吸器疾患患者の意思決定支援における看護師の役割を明確にする. 香川県看護学会誌: 9-14, 2016.
 - 30) 竹内久美子, 体坂みち子: 先天異常児の両親の意思決定に関わる看護師の役割—妊娠中に児が18トリソミーと診断された家族との関わりを通して. 近畿新生児研究会会誌21: 35-38, 2012.
 - 31) 森屋宏美: 出生前検査に関する遺伝相談を受けた妊婦の経験—遺伝学的検査に係る看護の一考察. 日本赤十字看護学会誌14(1): 33-40, 2014.
 - 32) 久世宏美: 胎児疾患を指摘された母親への意思決定支援と専門看護師の役割. 愛仁会医学研究誌9: 79-81, 2018.
 - 33) 秋山明子, 樋口京子: 緩和ケアにおけるエキスパートナースの倫理的な意思決定過程に関する研究. 日本倫理学会誌3(1): 19-27, 2011.
 - 34) 片岡優華: 妊娠期から育児期における夫婦の葛藤と意思決定に関する文献レビュー. 創価大学看護大学紀要1: 3-13, 2016.
 - 35) 渡邊賢治, 高橋良幸, 正木治恵: ゆらぐMNDの人々への「支援の適切さ」病棟看護師の支援の意味づけ方. 日本難病看護学会誌 20(3): 177-189, 2016.
 - 36) 長屋和美: 胎児異常を告げられて妊娠継続した母親に対する看護者のケア能力に関する文献調査. 静岡県母性衛生学会誌4(1): 29-38, 2014.
 - 37) 宮岡里衣, 宇都宮明美: 代理意思決定場面において看護師の感じる困難への急性—重症患者看護専門看護師が行う支援と能力. 日本 CNS 看護学会誌3: 7-14, 2018.
 - 38) 福地本晴美, 上條由美, 的場匡亮他: 抗悪性腫瘍薬治療患者へのチーム医療における外来看護師の役割—外来看護師の面接による「迷い」「不安」の心理的遷移. 保健医療福祉連携8(2): 136-145, 2015.

- 39) 万代ゆかり, 金山時恵: 訪問看護師による在宅終末期の意思決定支援に関する研究の動向と課題. *インターナショナル Nursing Care Research* 14(4): 73-82, 2015.
- 40) 永野佳世, 神里みどり: 臓器提供時の看護師の困難感と End of Life ケアへの課題. *日本クリティカルケア看護学会誌*12(3): 73-80, 2016.
- 41) 伊藤あゆみ, 糸島陽子, 奥津文子: 肝疾患患者の療養継続支援の研究の動向と課題. *人間看護学研究* (12): 57-64, 2014.
- 42) 石川幸司, 加藤加寿美, 川端和美他: 集中治療領域における終末期ケアに関する看護師の役割認識と課題. *日本集中治療学会雑誌*23(5): 601-604, 2016.
- 43) 田中智美, 滝川薫, 上野栄一他: 看護師が体験する造血幹細胞移植を受ける患者・家族への困難な介護介入 自由記載内容の分析から. *滋賀医科大学看護学ジャーナル*13(1): 23-26, 2015.
- 44) 神田尚子, 舟島なをみ, 中山登志子: クライエントの意思決定を支援する看護師行動に関する研究. *看護教育学研究*24(1): 25-40, 2015.
- 45) 根本恵理, 大槻久美: 急性期医療を担う病院における退院調整看護師の現状と課題. *日本看護学会論文集* (42): 168-171, 2012.
- 46) 三井貞代, 根井きぬ子, 三橋真紀子他: 退院支援委員会の取り組みの評価—病棟看護師の退院支援に対する意識変化. *日本看護学会論文集* (43): 71-74, 2013.
- 47) 豊田智子, 八代利香: 高齢者の退院に関わる退院調整・支援看護師の意思決定の拠り所. *日本看護倫理学会誌*7(1): 17-25, 2015.
- 48) 渡慶次里美, 朝日詩麻, 宮里美智子他: がん患者及び家族の意思決定支援の取り組み コミュニケーション技術の活用による看護師の意識の変化. *沖縄県看護研究学会集録*32: 33-35, 2018.
- 49) 大河正美, 中村真寿美, 坂本妙子他: 3年次看護職員の道徳的感性の現状. *日本看護学論文集*46: 151-154, 2016.
- 50) 堀理江: がん合併妊娠患者と家族を支援する看護師の役割 —がん治療方針を巡る意思決定を支える. *ヒューマンケア研究学会誌*9(2): 1-10, 2018.
- 51) 中嶋美奈, 木谷晴佳, 國廣美早他: 外科病棟におけるベテラン看護師の終末期患者・家族への意思決定支援のあり方. *中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌*13: 79-82, 2018.
- 52) 御家瀬真由, 田中いずみ: 急性期病院におけるジェネラリストナースの退院支援に関する現状「病棟看護師の退院支援実践に関する自己評価尺度」を用いて. *北海道看護研究学会集録 平成30年度*: 11-13, 2018.
- 53) 長岡真希子, 中村順子, 佐藤亜希子他: A圏域における病棟看護師の退院支援の取り組みと自己評価. *秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻紀要*26(1): 61-68, 2018.
- 54) 菅原佑菜, 佐藤大介: 若年性乳がん患者の初期治療選択の意思決定支援の実態と課題. *日本看護学会論文集*48: 211-214, 2018.
- 55) 木下恵, 川原田有規, 福田身江子他: 筋萎縮性側索硬化症患者・家族の意思決定支援に対する病棟看護師の認識 気管切開 下人工呼吸器の導入に焦点を当てて. *日本看護学会論文集* (45): 68-71, 2015.
- 56) 阿部深雪, 兼子奈津子, 木村祥子: 移植の意思決定支援に対する看護師の意識調査 IC 前後の支援や悩みに焦点をあてて. *日本看護学会論文集* (42): 168-171, 2012.
- 57) 舞弓京子: インフォームドコンセントに関する看護師の認識—治療決定に着目して. *医学と生物学* 6(2): 1005-1010, 2013.
- 58) 田島康子: インフォームドコンセントに関わる看護師の教育プログラム開発に向けた教育上の課題. *日本看護倫理学会誌*10(1): 52-59, 2018.
- 59) 酒井智子, 渡邊美奈: 高松赤十字病院におけるがん患者カウンセリングの現状と課題. *高松赤十字病院紀要* 2: 27-30, 2015.
- 60) 土橋千咲, 尾晴恵, 野澤美江子他: がん患者の妊孕性温存に関する意思決定に向けた情報収集・相談の様相と困難. *大阪大学看護学雑誌*25(1): 8-25, 2019.

- 61) 石垣淳子, 松原由美子: 離島で最期を迎える意思決定支援 孤立型離島の唯一の入院病床をもつ医療機関でのケースを通して. 沖縄県看護研究学会集録32: 56-58, 2018.
- 62) 森一恵, 杉本和子: 高齢がん患者の終末期に関する意思決定支援の実際と課題. 岩手県立大学看護学部紀要14: 21-32, 2012.
- 63) 伊藤真理, 松久美子, 多田昌代他: 集中治療室で終末期に至った患者に対する急性・重症患者看護専門師の倫理調整. 日本クリティカル看護学会誌10(3): 11-21, 2014.
- 64) 野真理: 超高齢者の終末期医療における家族の代理意思決定に対する看護師の臨床判断. 日本赤十字九州国際看護大学紀要 (14): 1-12, 2015.
- 65) 藤浪千種, 森一恵, 桑原美香: 救命救急初療にある患者の家族に対する看護師の代理意思決定支援. せいらい看護学会誌 8(2): 9-16, 2018.
- 66) 石井薫: 入院中の患者に対する意思決定・自己決定支援に関する文献検討ー対象を統合失調症に限定した場合と精神疾患以外とした場合の相違点と類似点. ヒューマンケア研究学会誌7(1): 59-64, 2015.
- 67) 小林尚司: 介護保険施設における高齢者の看取りに関する文献検討. 日本赤十字豊田看護大学紀要 7(1): 65-75, 2012.
- 68) 丹下みつる, 行田菜穂美, 齋藤祐子他: 退院・居宅支援における MSC 看護師の役割についてー2010年度の活動分析より. 癌と化学療法39: 42-44, 2012.
- 69) 木場しのぶ: 看護師によるがん患者の退院支援に関する文献研究. 看護・保健学研究14(1): 173-180, 2013.
- 70) 高松彩乃, 鬼塚智子, 池田綾他: A 病院における放射線治療の現状と今後の課題ー放射線治療における看護師の役割について考える. 福岡赤十字看護研究会収録 (26): 55-58, 2012.
- 71) 上西純子, 西山由美, 山本千寿他: 脊髄損傷のある青年期患者への看護ー座位から復学支援へ. 日本リハビリテーション看護学会学術大会集録 (24): 58-60, 2012.
- 72) 野上京子, 小坂寿江: 泌尿器ケアの質向上の取り組み 小集団活動の成果. 津山中央病院医学雑誌 28(1): 107-114, 2014.
- 73) 寺岡美千代, 山田覚: 救命救急センターのリーダー看護師育成に関する研究ーリーダー看護師の役割. 日本救急看護学会雑誌13(2): 19-28, 2011.
- 74) 池田麻左子: 急性期病院の小児病棟・NICU・GCU の看護師による退院支援の実際と課題ー医療的ケアが必要な重症心身障がい児と家族への関わりを通して. 日本小児看護学会誌24(1): 47-53, 2015.
- 75) 工藤礼子, 安達淑子, 金光幸秀: 緩和ストーマ保有者への看護師の役割. 日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会誌33(3): 52-60, 2017.
- 76) 田中智美, 滝川薫, 上野栄一他: 造血幹細胞移植を選択する患者への看護師の意思決定支援と影響要因 医師からの移植説明時における看護援助の実際. 滋賀医科大学看護学ジャーナル13(1): 27-30, 2015.
- 77) 布施恵子: がん診療連携拠点病院における治療法の意思決定を行う再発がん患者への看護支援. 岐阜県立看護大学紀要18(1): 143-151, 2018.
- 78) 影山葉子, 浅野みどり: 家族への退院支援に関する国内文献レビュー (第2報)ー退院における家族への意思決定支援に焦点を当てて. 家族看護学研究 第20巻 第2号: 106-116, 2015.
- 79) 金子文, 沢村久美子, 佐藤敦子他: 退院支援における病棟看護師の役割ー病棟看護師の退院支援に対する関りの内容分析. 日本看護学会論文集 (41): 193-196, 2011.
- 80) 檜木政子, 西尾聡子, 作田裕美他: 国内外における遺伝性乳がん看護を探る. 大阪市立大学看護学雑誌 (15): 8-16, 2019.
- 81) 半田浩美, 滝川忍, 山上三枝子他: 小児胃瘻外来に通院する重症心身障害児の母親がとらえた在宅療養生活. 日本看護学会論文集 (41): 193-196, 2011.
- 82) 黒木由里子, 生山笑, 腰原麻衣子他: 全国がん診療連携拠点病院におけるがん患者カウンセリング

- の実態と課題. 日本赤十字看護学会誌15(1) : 55-60, 2015.
- 83) 今井彩, 松崎奈々子, 阿久澤千恵子他 : NICU 看護師の母親に対する退院支援に関する研究の動向と課題. 日本小児看護学会誌25(3) : 84-90, 2016.
- 84) 申于定 : ALS 患者の病初期における診断・受療過程の体験と看護支援の検討. 日本看護学論文集20(3) : 191-203, 2016.
- 85) 坂本節子, 音瀬穂子 : がん看護外来への支援内容と専門・認定看護師の活動. 看護実践の科学42(6) : 14-20, 2017.
- 86) 松本美奈, 阿部泰之, 田中幸恵 : 他がん患者の退院支援と地域連携を促進するための緩和ケア認定看護師の役割. 癌と化学療法42 : 69-71, 2015.
- 87) 林優美, 大佐古貴代, 宮崎朋子他 : 心不全患者への退院調整活動の実際と退院調整看護師の役割を考える. 退院支援実践自己評価尺度を活用して. 看護実践の科学43(3) : 70-77, 2018.
- 88) 市原真穂, 小室佳文, 荒木暁子 : 高次脳機能障害のある子どものリハビリテーション専門施設から学校施設への移行を支援する看護実践. 日本小児看護学会誌24(1) : 47-53, 2016.
- 89) 西村香里, 木村敦子他 : 地域包括支援ケアシステムにおける当院の役割 看護連携の活動を通して考える. 加古川市民病院機構学術誌 4 : 24-27, 2015.
- 90) 谷本真理子, 瀬戸奈津子, 高橋奈美他 : 慢性疾患患者における生命維持療法を巡る意思決定支援実践状況から見た課題分析. 日本慢性看護学会誌12(1) : 2-11, 2018.
- 91) 馬場枝里香, 服部律子 : 出生前診断によって胎児の予後不良を予想された家族へのバースプランの開発. 岐阜県立看護大学紀要15(1) : 3-15, 2015.
- 92) 森京子, 古川智恵在宅緩和ケアへ移行する終末期がん患者の意思決定を支える看護師の援助. 四日市看護医療大学9(1) : 23-33, 2016.
- 93) 西岡久美子, 中野綾美 : 保存期慢性腎臓病患者のエンパワーメントを支援する看護ケアの構成. 高知女子大学看護学会誌42(2) : 1-10, 2017.
- 94) 西岡久美子, 中野綾美 : 保存期慢性腎臓病患者のエンパワーメントを支援する看護ケアの状況. 高知女子大学看護学会誌43(1) : 67-78, 2018.
- 95) 尾黒正子, 丸橋佑紀, 竹歳麗奈他 : 救急センターに救急搬送された重症患者家族への関わり方. インターナショナル Nursing Care Research 14(4) : 73-82, 2015.
- 96) 矢向道瀬, 今堀亜紀, 加藤元子ほか : 在宅での脳死肺移植待機中のレシピエントの心理と訪問看護師の役割 訪問看護が関わった事例のインタビューを通して. 日本看護学会論文集 (45) : 43-46, 2015.
- 97) 日浅友裕, 片岡純 : がん放射線療法看護の質評価指標の開発. 日本がん看護学会誌31 : 1-11, 2017.
- 98) 厚生労働省 (2007) 「終末期医療の決定プロセスに関するガイドライン」 <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/05/dl/s0521-11a.pdf>
- 99) 日本老年医学会 (2012) 「高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドラインー人工的水分・栄養補給の導入を中心として」 http://www.jpn-geriat-soc.or.jp/info/topics/pdf/jgsahngl_2012.pdf
- 100) アーネステイン・ウィーデンバック (著), 外口玉子, 池田明子 (翻訳) : 臨床看護の本質ー患者援助の技術, 東京 : 現代社, 21-22, 80, 1984.